

特定非営利活動法人パクト

平成 29 年度(2017 年度) 事業報告

自 平成 29(2017)年 10 月 1 日

至 平成 30(2018)年 9 月 30 日

目 次

1.	復興サポートステーション事業	5 頁
2.	子ども支援事業	
A.	子どもの居場所づくり活動・『みちくさルーム』の実施	7 頁
B.	平日の子どもの居場所づくり活動・『みちくさハウス』	11 頁
C.	小中学校への学用品支援	12 頁
D.	子ども支援ネットワーク会議運営	13 頁
3.	二又復興交流センター運営事業	16 頁
4.	陸前高田市グローバルキャンパス施設管理業務	17 頁

1. 復興サポートステーション事業

実施範囲、期間	範囲：陸前高田市 期間：平成25年1月より継続
活動資金	復興庁復興交付金事業、自己資金(寄付金、会費)
事業実施の経緯	陸前高田市復興サポートステーションは、災害ボランティアセンター閉鎖直後の2013年1月に、同センターの業務を引き継ぐ目的で開所した。
事業目的	東日本大震災で甚大な被害を受けた陸前高田市を中心において、震災により被害を受けた方々に対して、地域密着型の継続した支援事業を行い地域の復興、復興後の地域活性化に寄与する。 2012年12月に閉鎖した災害ボランティアセンターの業務を引き継ぎ、ボランティア活動の拠点としてボランティアの受け入れ及び派遣を行うことで、住民ニーズに応えるとともに、陸前高田を訪れるきっかけを提供する。 これまでの経験やノウハウを活かし、復興教育や災害対応研修に寄与することを目指す。
受益者	陸前高田市民
事業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 被災者並びに市民要望のとりまとめ 2. ボランティアの募集・受付 3. ボランティア活動終了後の管理 4. コーディネート 5. 情報発信
ボランティア活動者数	個人計：760名 団体計：1,825名（のべ100団体） 合計：2,585名
今年度の具体的な活動と成果	<p>1.被災者並びに市民要望のとりまとめ</p> <p>昨年度同様、「陸前高田市復興支援連絡会」の協力をいただき、仮設住宅を中心にチラシを配り、引っ越し補助や除草の問い合わせが多く寄せられた。また、市の地域福祉課を経由して買い物や通院の補助、お風呂掃除や窓拭き等、より生活に密着した依頼も増えている。震災から時間の経過とともに被災者が高齢となり、これまでは自分でできていたことがままらなくなってきたことがうかがえる。</p> <p>今年度、復興サポートステーションは21件のニーズの新規依頼を受け、のべ401回、のべ2,801名のボランティアを紹介した。ニーズの内容は以下の通りである。</p> <p>遺留品探し——18回 生活支援——92回 引越し補助——3回 農業支援——74回 漁業支援——48回 その他——145回</p> <p>・遺留品探しについて 米崎町沼田の現場にて、第二・第四土曜日に遺留品捜索を行った。震災から時間が経つにつれ、思い出の品が見つかる回数は減っているが、県外からのボランティアだけでなく、地元の方(家族が行方不明)も活動に参加するようになり、住民の気持ちに寄り添う形で進めることができた。また、骨のようなものが見つかったことがあり、警察が同じ現場で捜索をするようになるなど、関係機関にもこれまで以上に関心を持っていただくことができた。</p>

・生活支援について

【除草】

休耕田、耕作放棄地、自宅跡地等の草刈を行った。自宅再建や公営住宅に引っ越すなどして、仮設住宅を退去する世帯も多く、仮設住宅に残る人たちだけでの環境整備がなかなか進まない状況となっている。そのような背景から自治会長が除草の依頼をしてることが多かった。また、「自宅跡地を綺麗にして、何かをしたい。震災後何もする気になれなかったがやっと何かをする気になれた」という声があり、住民の気持ちに寄り添う形での活動ができた。

【片付け】

災害公営住宅で一人暮らしの高齢者の方や、津波が入った自宅を7年以上放置していた方からの依頼等、片付けの依頼が寄せられている。震災後足腰が弱くなり、思うように動けなくなったり、様々な事情から被災した自宅を放置していた方など、依頼者にはそれぞれの背景があり、それを考慮しながら活動した。依頼者からは片付けだけでなく、ボランティアとの会話から「元気をもらった」と、大変喜ばれている。

【引越し】

仮設住宅から公営住宅への引っ越しや、仮設住宅の集約による仮設から仮設への引越しの補助、また、引っ越し後の仮設住宅の清掃の補助を行った。

【買い物】

市役所の地域福祉課を経由して寄せられる依頼は、スタッフのみで対応したり、ボランティアを紹介したり、依頼の内容に配慮しながら対応している。問い合わせも増えており、必要とされる活動であることがうかがえる。生活の質が向上し、依頼者からも大変喜ばれている。依頼者によっては毎回同じ人が対応した方が良い場合があり、マッチングが難しい。高齢者や障がいを持った方からのニーズに対応するため、職員が研修に参加して理解を深めることもできた。

・農業、漁業支援について

【農業】

震災の影響により慢性的に人手不足である農家等の手伝いを行なった。津波をかぶった土地で、新たにりんごの木を植えたが、思うように育たず、木を移植する手伝いを行なった。空いた土地を畑として再生し、地域の方々に使っていただけるよう整備した。地域の方が様子を見にきたり、野菜の育て方を教える等、関心を持ってくれる人が少しずつ増えており、交流や憩いの場となるよう、今後も継続して手伝いをしていきたい。

【漁業】

農業支援同様に、震災の影響で人手不足が問題になっている。ワカメやホタテの最盛期に、カゴの洗浄等、一般のボランティアで対応できる内容のものを手伝った。

・その他

子ども支援事業のみちくさハウスの整備などを行った。

地域サポート会議に出席し、各団体との情報交換に努めた。出席している団体からニーズを紹介されたり、パクトの活動を住民に紹介してもらうこともあった。

2. ボランティアの募集・受付

震災から時間が経つにつれ、ボランティアの数は減ってきているが、年間約 2,000 人がサポートステーションを経由して活動している。今後はニーズに合わせたボランティア数の確保や、専門性の高いニーズに対応できるボランティアの確保のため、今まで以上にボランティア募集を工夫する必要がある。

3. ボランティア活動終了後の管理

ボランティア活動実施報告書に記入してもらい、それを基に資材の紛失や、ボランティアの怪我の有無などを確認し、大きな問題なく活動を終了することが出来ている。活動終了後、ボランティアに感謝を伝えるに依る依頼者も多くいる。破損した資材については、スタッフが修理し、次回の活動に支障がないよう努めた。

4. コーディネート

新規ニーズがあった場合は、現場確認とともに依頼者からの聞き取りをしっかりと行い、ボランティアを必要とする背景の把握に努めた。聞き取った内容をニーズ表にまとめ、オリエンテーションを行うことで、活動の内容を理解してもらった上で活動場所に向かった。

また、「復興教育」に関するコーディネートも行った。今年も県内陸部を中心に中学校・高等学校から授業の一環として多くのボランティア参加があった。モビリア仮設住宅や気仙大工左官伝承館のご協力をいただき、ボランティア活動だけでなく、震災後の陸前高田市の様子を伝えることができた。

受け入れた学校、人数は以下の表の通りである。

	中学校	高等学校	大学	計
県内	6回(6校) 386名	12回(7校) 624名	0回(0校) 0名	18回(13校) 1,010名
県外	0回(0校) 0名	2回(1校) 17名	7回(5校) 114名	9回(6校) 131名
計	6回(6校) 386名	14回(8校) 641名	7回(7校) 114名	27回(19校) 1,141名

5. 進捗管理

日々、活動写真を管理し、活動報告書を作成している。月毎の活動者数や活動内容についてまとめ、毎月市役所に提出する。ボランティアの人数集計や、活動したニーズの詳細を入力している。活動の目安がわかりやすくなり、マッチングの際にも役立つ。

6. 情報発信

毎月の活動報告はホームページにて、毎週の活動報告は Facebook にて掲載し、活動内容や陸前高田市の現状発信に努めた。活動依頼者とボランティアのプライバシー保護の為、写真掲載の可否を問いながら掲載した。活動内容だけでなく依頼者から寄せられた感謝の声などをできる限り紹介することで、そこに関わる人たちの想いを広く伝え、ボランティア活動に関心を持ってもらえるよう心がけた。

<p>今後の課題</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティア募集の工夫 ニーズの状況や変化に合わせて、必要なボランティアの人数や専門性が求められるようになっている。フェイスブックやホームページを使って、闇雲にボランティア募集をするのではなく、具体的に必要な人数や活動内容をわかりやすく表現し、様々な方法で募集していく。 2. 資金の確保 これまで運営資金として補助金をいただいて活動してきたが、補助金が減額されたり、いただけなくなることも想定される。その後の運営資金を確保する必要がある。 3. 人材育成 様々な理由で退職する職員がおり、求人は出しているものの、なかなか応募がないのが実情である。そのため既存職員の育成に注力し、職員のスキルアップが団体のスキルアップにつながるよう、働きかける。
--------------	---

2. 子ども支援事業

A. 子どもの居場所づくり活動・『みちくさルーム』の実施

実施範囲、期間	<ol style="list-style-type: none"> 1. 陸前高田市気仙町：平成 30 年 3 月 2. 陸前高田市広田町：平成 23 年 3 月 3. 陸前高田市矢作町：平成 25 年 3 月 4. 陸前高田市小友町：平成 25 年 3 月
活動資金	『5』のつく日。JCB で復興支援、東日本大震災復興支援財団、赤い羽根チャリティホワイトプロジェクト、寄付金
事業実施の経緯	東日本大震災(以下、「震災」)発災直後、避難所に暮らす子どもたちの保護者からの要望を受け、気仙町での子どもの居場所づくりを開始し、その後各地域の地元の方々からの要望や、他団体からの引き継ぎ依頼を受け、各地域での実施に至った。
事業目的	震災により多くの遊び場、家族、生活環境を失った子どもたちに対し、気軽に集える居場所を提供し、子どもたちがのびのび過ごすことにより、震災によるストレスを軽減させることを目的とする。
受益者	陸前高田の上記 4 地区に暮らす子ども
事業内容	参加大学と協力し、地域のコミュニティセンターにおいて、子どもの遊び、学習のプログラムを企画し、各地区月 1 回の頻度で定期実施した。
参加大学	<ol style="list-style-type: none"> 1. 陸前高田市気仙町：聖心女子大学 2. 陸前高田市広田町：上智大学ボランティアサークル・SVN、日本赤十字北海道看護大学・災害 beatS 研究会 3. 陸前高田市矢作町：岩手大学 4. 陸前高田市小友町：東北大学、日本赤十字北海道看護大学・災害 beatS 研究会
今年度の具体的な活動内容	<p>前年度に引き続き、協力大学と共に、各地区月 1 回の頻度で子どもたちの遊びや学びのサポートを行った。</p> <p>2017 年度に入り、各地区ともに、小学校に建てられていた仮設住宅の撤去の動きが活発化し、気仙町では 2017 年 11 月より小学校の校庭が復旧した。</p> <p>このことを受け、2011 年に開始した本活動は、震災の影響を受けて少なくなったとされる子どもの居場所を作ることに際して、一定の役目を終えたと判断し、2018 年 3 月末をもって、その活動に区切りを打つ運びとなった。</p> <p>そのため、2018 年 1 月には各地区の参加者やその保護者、地域の関係者、小学校、協力大学等に直接、または書面にて活動終了の告知を行った。</p> <p>2018 年 3 月には、各地区において最終回の活動として、「みちくさ思い出ポスター作り」のワークショップを行い、最後の挨拶を行った。</p> <p>2011 年 10 月より開始し、およそ 6 年半にわたり継続して子どもの居場所を作り、子どもたちの為に様々な体験や交流の機会を創出してきた本活動は、その役割を果たし、2018 年 3 月をもって終了した。</p> <p>1. 特別企画 (1) ハロウィンパーティ 2017 年 10 月に、みちくさハウスにてハロウィンの特別企画を実施し、みちくさルームに参加する各地区の子どもたちをマイクロバスで送迎した。学生ボランティアの協力の下、ハロウィンの仮装やレクリエーションゲー</p>

	<p>ムを行い、みちくさルーム、みちくさハウスで合わせて 32 名の子どもが参加した。</p> <p>(2) 楽習会 小学校の春休み、夏休み期間中に、日本赤十字北海道看護大学・災害 beatS 研究会と共に広田町、小友町にて「楽習会」を実施。活動では、宿題のサポートの他、体を動かす遊びやクイズ、工作など、様々な体験アクティビティを実施した。</p> <p>2. その他の活動 (1) たかた子どもキャンパスへの参加 教育委員会生涯学習課主催の「たかた子どもキャンパス」に参加協力した。2017 年、2018 年ともに、6 月は田植え体験に参加し、2017 年 12 月にはプログラミング教室に参加した。活動参加に当たっては、協力大学の学生ボランティアを派遣し、子どもの見守りやサポートを行った。秋の稲刈り体験にはスタッフが参加し、活動に協力した。</p>																																																																																																																
<p>今年度の成果</p>	<p>1. 定量的成果</p> <p>(1) 活動実施回数 (特別企画含む)</p> <table border="1" data-bbox="467 891 1331 1077"> <thead> <tr> <th></th> <th>広田</th> <th>気仙</th> <th>矢作</th> <th>小友</th> <th>特別企画</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2014年度</td> <td>44</td> <td>39</td> <td>22</td> <td>26</td> <td>2</td> <td>133</td> </tr> <tr> <td>2015年度</td> <td>39</td> <td>39</td> <td>28</td> <td>22</td> <td>0</td> <td>128</td> </tr> <tr> <td>2016年度</td> <td>15</td> <td>28</td> <td>21</td> <td>16</td> <td>5</td> <td>85</td> </tr> <tr> <td>2017年度</td> <td>9</td> <td>8</td> <td>9</td> <td>9</td> <td>0</td> <td>35</td> </tr> </tbody> </table> <p>(2) 参加者数 (特別企画含む)</p> <table border="1" data-bbox="467 1167 1382 1344"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th colspan="2">広田</th> <th colspan="2">気仙</th> <th colspan="2">矢作</th> <th colspan="2">小友</th> <th colspan="2">特別企画</th> <th colspan="2">合計</th> </tr> <tr> <th>子ども</th> <th>ボラ</th> <th>子ども</th> <th>ボラ</th> <th>子ども</th> <th>ボラ</th> <th>子ども</th> <th>ボラ</th> <th>子ども</th> <th>ボラ</th> <th>子ども</th> <th>ボラ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2014年度</td> <td>476</td> <td>253</td> <td>453</td> <td>215</td> <td>243</td> <td>90</td> <td>164</td> <td>77</td> <td>44</td> <td>10</td> <td>1,380</td> <td>645</td> </tr> <tr> <td>2015年度</td> <td>421</td> <td>180</td> <td>330</td> <td>200</td> <td>355</td> <td>92</td> <td>166</td> <td>74</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>1,272</td> <td>546</td> </tr> <tr> <td>2016年度</td> <td>150</td> <td>80</td> <td>285</td> <td>137</td> <td>182</td> <td>106</td> <td>159</td> <td>83</td> <td>88</td> <td>49</td> <td>864</td> <td>455</td> </tr> <tr> <td>2017年度</td> <td>151</td> <td>50</td> <td>117</td> <td>31</td> <td>52</td> <td>38</td> <td>96</td> <td>46</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>416</td> <td>165</td> </tr> </tbody> </table> <p>2017 年 4 月から、地域ごとの実施回数が半減したことに加え、2018 年 3 月で活動終了したため、実施回数、参加者総数共に減少しているものの、実施ごとの平均参加人数は約 12 名と、2014～2016 年度 (平均 10 名程度) と比較しても増加している。</p> <p>2. みちくさハウスへの円滑な移行 事業終了に先立ち、2018 年 1 月より、活動終了とみちくさハウスへの移行に関する告知を、参加者と保護者、および市内外の関係各所に告知したことにより、大きな混乱やトラブルもなく、活動の幕を閉じることができた。</p> <p>長年子どもを参加させていた保護者からは、寄付金と共に感謝の手紙をいただくなど、継続して活動を実施してきたことの成果が見られた。これまでみちくさルームの活動にご協力いただいていた協力大学の学生ボランティアには、2018 年 4 月からはみちくさハウスに参加いただくよう要請し、活動の移行も大きな問題なく行うことができた。</p>		広田	気仙	矢作	小友	特別企画	合計	2014年度	44	39	22	26	2	133	2015年度	39	39	28	22	0	128	2016年度	15	28	21	16	5	85	2017年度	9	8	9	9	0	35		広田		気仙		矢作		小友		特別企画		合計		子ども	ボラ	2014年度	476	253	453	215	243	90	164	77	44	10	1,380	645	2015年度	421	180	330	200	355	92	166	74	0	0	1,272	546	2016年度	150	80	285	137	182	106	159	83	88	49	864	455	2017年度	151	50	117	31	52	38	96	46	0	0	416	165										
	広田	気仙	矢作	小友	特別企画	合計																																																																																																											
2014年度	44	39	22	26	2	133																																																																																																											
2015年度	39	39	28	22	0	128																																																																																																											
2016年度	15	28	21	16	5	85																																																																																																											
2017年度	9	8	9	9	0	35																																																																																																											
	広田		気仙		矢作		小友		特別企画		合計																																																																																																						
	子ども	ボラ	子ども	ボラ	子ども	ボラ	子ども	ボラ	子ども	ボラ	子ども	ボラ																																																																																																					
2014年度	476	253	453	215	243	90	164	77	44	10	1,380	645																																																																																																					
2015年度	421	180	330	200	355	92	166	74	0	0	1,272	546																																																																																																					
2016年度	150	80	285	137	182	106	159	83	88	49	864	455																																																																																																					
2017年度	151	50	117	31	52	38	96	46	0	0	416	165																																																																																																					

B. 平日の子どもの居場所づくり活動・『みちくさハウス』の実施

実施範囲、期間	陸前高田市米崎町にて2017年1月より継続																																
活動資金	東日本大震災復興支援財団、赤い羽根チャリティホワイトプロジェクト、寄付金																																
事業実施の経緯	震災から5年の節目を迎えた2016年3月以降、団体内で継続して話し合いを行い、子ども支援事業の方向性を検討した。その結果、これまで週末に行ってきた子どもの居場所作りに加え、平日にも子どもが安心して過ごせる場所が必要であるとの結論に至った。発災直後から実施してきた『みちくさルーム』を発展させ、子どもが気軽に集える居場所の拠点を作るべく、当事業を開始した。																																
事業目的	『みちくさルーム』の活動を発展させ、主に以下の3点を目的に事業を実施する。 1. 子どもが子どもらしく過ごせる居場所の創出 2. 子どもの主体性を育み、将来に対する可能性、選択肢の多様性の提示 3. 次世代のまちの担い手となる子どもたちの定住およびUターン等の促進																																
受益者	陸前高田市に暮らす子どもと保護者																																
事業内容	2017年7月下旬のオープン以降、2018年3月までは平日の水、金曜日、2018年4月からは平日の2日間に加え、毎週土曜日と不定期で日曜日にも開所することとなった。 平日の活動では、宿題やブロック、ボードゲームなどの室内遊びや庭遊びなど日常的な活動を行い、週末には学生ボランティアと協働で工作遊びや簡単な調理など、多様なアクティビティを実施した。																																
今年度の成果	<p>1. 定量的成果</p> <p>みちくさハウスでは、2018年4月より開所日数、来所者数、参加ボランティア数がそれぞれ増加した。</p> <p>(1) 実施回数</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>年/月</th> <th>開所日数</th> <th>年/月</th> <th>開所日数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2017年10月</td> <td>8</td> <td>2018年4月</td> <td>9</td> </tr> <tr> <td>2017年11月</td> <td>9</td> <td>2018年5月</td> <td>13</td> </tr> <tr> <td>2017年12月</td> <td>8</td> <td>2018年6月</td> <td>16</td> </tr> <tr> <td>2018年1月</td> <td>8</td> <td>2018年7月</td> <td>12</td> </tr> <tr> <td>2018年2月</td> <td>9</td> <td>2018年8月</td> <td>7</td> </tr> <tr> <td>2018年3月</td> <td>8</td> <td>2018年9月</td> <td>14</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: right;">合計</td> <td colspan="2">121</td> </tr> </tbody> </table> <p>2018年3月までは毎週水曜、金曜の2日間の開所としていたが、みちくさルームの活動終了に伴い、2018年4月から開所日数を増やし、毎週土曜日と、第4日曜日にも開所することとなり、地域の子どもや保護者がみちくさハウスを訪れる機会を増やすことができた。</p> <p>(2) 来所者数</p>	年/月	開所日数	年/月	開所日数	2017年10月	8	2018年4月	9	2017年11月	9	2018年5月	13	2017年12月	8	2018年6月	16	2018年1月	8	2018年7月	12	2018年2月	9	2018年8月	7	2018年3月	8	2018年9月	14	合計		121	
年/月	開所日数	年/月	開所日数																														
2017年10月	8	2018年4月	9																														
2017年11月	9	2018年5月	13																														
2017年12月	8	2018年6月	16																														
2018年1月	8	2018年7月	12																														
2018年2月	9	2018年8月	7																														
2018年3月	8	2018年9月	14																														
合計		121																															

年/月	利用者					計
	未就学児	小学生	中学生	保護者	地域	
2017年10月	11	51	0	6	1	69
2017年11月	11	32	0	11	0	54
2017年12月	8	23	0	8	0	39
2018年1月	8	21	0	7	0	36
2018年2月	12	24	0	9	4	49
2018年3月	10	23	0	8	3	44
2018年4月	16	80	1	21	3	121
2018年5月	34	124	0	36	8	202
2018年6月	44	168	1	45	6	264
2018年7月	33	120	3	35	4	195
2018年8月	35	89	0	35	2	161
2018年9月	27	116	0	33	5	181
合計	249	871	5	254	36	1415

2017年10月から2018年3月までは冬季期間で日没時間が早いことなどもあり、参加者数が伸び悩んだものの、4月からは開所日数の増加や、新入生の入学、ロコミなどの要因から、来所者数が急激に増加した。

(3) ボランティア数

年/月	ボランティア			
	サポステ	関係者	地域	学生
2017年10月	0	4	0	4
2017年11月	0	3	0	0
2017年12月	0	1	0	0
2018年1月	0	0	0	6
2018年2月	0	0	0	0
2018年3月	0	1	2	0
2018年4月	2	14	0	6
2018年5月	2	17	0	6
2018年6月	0	5	1	27
2018年7月	23	20	21	6
2018年8月	4	8	0	28
2018年9月	0	4	1	30
合計	31	77	25	113

2018年3月までみちくさルームの活動に参加していた、協力大学の学生ボランティアから、6月から本格的にみちくさハウスの活動に参加し始めたことにより、参加ボランティアの人数も増加した。

	<p>2. 多様な体験の機会創出 2018年4月より、週末にも開所することとなり、これまでみちくさルームで培ってきたノウハウやつながりを生かし、体験型のアクティビティを積極的に企画実施した。 主なアクティビティ内容は以下の通りである。 4月：段ボールハウス作り、鳥の巣箱作り 5月：草花のしおり作り、鯉のぼり工作 6月：田植え体験、お菓子作り、森遊び 7月：ブルーベリージャム作り、みちくさ夏まつり 8月：カレー作り、川遊び、アートワークショップ 9月：交通安全教室参加、月見団子作り、まちびらきイベント参加 アクティビティの内容としては、みちくさハウス周辺の自然を生かした遊びや、地域の伝統に触れられるもの、子供の感性や表現力を豊かにするもの、調理のスキルや安全への意識を高めるといった「生きる力」につながるものなどを意識して企画した。 これらのアクティビティの実施により、「子どもに生きる力と喜びを」という、みちくさハウスのコンセプトに沿った事業を展開することができた。</p> <p>3. みちくさルームからの引き継ぎ みちくさルームの活動終了後も、みちくさルームの元参加者には、みちくさハウスの活動予定を記載した「みちくさハウス通信」を郵送し、活動案内を行った。その結果、2018年4月以降は、土日を中心にみちくさルームに参加していた子どもたちが、みちくさハウスの活動に参加するようになった。</p> <p>4. 他団体・関係者、保護者との協力・連携体制の構築 前年度に引き続き、他団体や行政機関、地域住民との連携を深めることができた。みちくさハウスの特別企画に講師役やサポート役で市民の方や近所の高齢者が参加してくださったり、地域に暮らす若者がボランティアで参加してくださったりと、地元在住のボランティア・協力者を増やすことができた。 他団体や行政からの声かけで、イベントに参加する機会も増え、つながりを強化することができた。 また、保護者の来所人数も増加し、保護者同士で語り合ったり、一息つける居場所を提供すると共に、子どもの見守りやアクティビティの準備、片付けなど、運営にご協力いただいた。 みちくさハウスという活動拠点があることで、地域の方々や保護者も気軽に出入りすることができ、より地域に密着した活動が展開できたと考える。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>1. 人員不足 前年度よりスタッフの人数は増えたものの、来所者数も倍増したため、十分な人員が確保できたとは言い難い。一人一人の子どもや保護者に寄り添い、施設内の安全性を確保する為にも、また今後の安定した運営の為にも、長期で事業に携わることのできる人材を確保することが必要とされる。</p>

	<p>2. 資金の確保</p> <p>2017年度は、来所者数の増加や、活動内容の充実など、みちくさハウスにとっては大躍進の年となったが、それに対し、2018年1月以降の活動については、自己財源（寄付金）以外の予算のめどがついておらず、資金面では先の読めない状況に直面している。</p> <p>地域の子ども・子育てのニーズに応え、今後も安定して事業を運営していくため、活動継続のための資金を調達することが急務である。</p>
--	--

C. 小中学校への学用品支援

実施範囲、期間	<p>範囲：陸前高田市内の小中学校</p> <p>期間：平成24年4月～平成30年3月</p>
活動資金	立教小学校からの寄付金
事業実施の経緯	立教小学校で行われる礼拝時に、生徒や保護者、教職員が捧げる祈りとともにたむける献金を、陸前高田の子どもたちのために使用してほしいという立教小学校からのお申し出により、毎月5万円の寄付を陸前高田市の小、中学校への学用品寄贈に活用することとなった。
事業目的	震災後、多くの学用品、備品が流失し、限られた予算の中で、学校教育に必要とされる備品を購入している陸前高田市内の小中学校に、必要な学用品を寄贈することにより、市内の学校教育環境の改善に寄与し、保護者への経済的な負担を減らす。同時に、必要備品を地元の業者に発注することで、地域産業の復興に寄与する。学用品寄贈のために市内の学校を定期的に訪問することにより、各学校との関係を強化する。
受益者	<p>陸前高田市内の該当小学校児童数：656名</p> <p>陸前高田市内の該当中学校生徒数：186名</p> <p>計：842名(平成29年10月1日時点)</p>
事業内容	<p>市内の各小・中学校を定期的に訪問し、必要とされる学用品、学校備品の寄贈を行った。寄贈にあたっては、月ごとに担当学校を振り分け、事前に必要な学用品、学校備品を学校に確認・発注の上、パクト子ども支援担当スタッフが各学校に直接お届けに伺った。加えて、活動資金の寄付元である立教小学校へお礼を含めた報告書を送付した。</p> <p>前年度の事業課題として挙がっていたスタッフの人員不足に加え、物資のニーズが震災直後に比べ落ち着いたという判断から、パクトとして支援に関わる期間は2018年3月までが妥当であるとし、2018年1月にその旨を寄付元にも伺いご説明した。双方の合意の下、学用品支援の活動は、パクトの手を離れることとなった。</p>
今年度の成果	<p>1. 市内小中学校との関係づくり</p> <p>前年度に引き続き、支援先である市内の小学校、中学校を訪問し、学用品をお届けすることで教職員の方々と直接お会いする機会ができた。また、学校ごとの状況をお聞きすることで、子どもたちがおかれている環境をより深く知る事ができ、子ども支援事業として有益な情報を得ることができた。</p> <p>2. 支援先</p> <p>① 小学校：米崎小学校、高田小学校</p> <p>② 中学校：高田東中学校、気仙中学校</p> <p>3. 主な寄贈物品</p>

	<p>寄贈物品は、運動部で使用するボールなどの備品や、学校内で使用する機材、展示用備品の他、児童生徒の心の健康に関するアンケートなど、各学校のニーズを丁寧に聞き取り必要なものをお届けすることができた。</p> <p>特に、平成 30 年 4 月から統合される学校には、引越しなどで様々な物品が必要となることから、2 回に分けて手厚い支援を行った。</p> <p>4. 他団体への引き継ぎ</p> <p>パクトが学用品支援の事業から手を引くにあたり、寄付元には直接伺ってのご挨拶、ご説明を行うと共に、その後の運営方法についても、様々な提案を行った。寄付元との話し合いの結果、寄付元と関係の深い団体に支援の仲介役を引き継ぎ、支援継続への一助を担うことができた。</p>
--	--

D. 子ども支援ネットワーク会議運営

実施範囲、期間	<p>範囲：陸前高田市にて活動する子ども支援団体</p> <p>期間：平成 23 年 11 月より継続</p>
活動資金	寄付金等自己資金
事業実施の経緯	<p>震災後、多種多様な支援団体が、陸前高田において子どもを対象とした支援活動を実施する中で、複数の団体による支援が重複する地区や、支援の行き届かない地区が見られることが問題視されたことを受け、陸前高田市における子ども支援のマッピングを行い、団体間で子どもに関する情報やニーズを共有するために、同会議が発足された。</p>
事業目的	<p>陸前高田市内で活動する子ども支援団体や、市内の教育機関、保護者が、子どもに関する情報を共有しあい、お互いに協力しあえる体制を作ることを目的とする。</p>
受益者	陸前高田市内の子ども、保護者、教育関係者
事業内容	<p>月 1 回の『子ども支援ネットワーク会議』を運営し、支援活動や市内の子どもに関するニーズの共有を行った。加えて、会議後に議事録を登録団体にメール送付した。</p> <p>加えて、出席者の発案により、陸前高田市内でのこども食堂の開催を検討・協議する分科会を開催した。複数団体で協議の結果、開催に向け準備を進める運びとなり、初回は「たかた子どもフェス」と銘打ち、遊びと食事提供のイベントとして実施した。その後、分科会は子ども支援 NW 会議から独立し、「たかたゆめキッチン実行委員会」が主体となり運営を行うこととなった。実行委員会内で、初回の活動の振り返りや次回に向けての準備を経て、2018 年 3 月に「たかたゆめキッチン」として、2 回目の活動を実施。その後は毎月 1 回の定例行事として活動を継続している。</p>
今年度の成果	<p>1. 団体同士のつながり、情報・意見交換の場の提供</p> <p>2017 年度も会議を継続して開催することにより、子ども・子育てに関わる団体・個人が定期的集まる機会を創出することができた。</p> <p>会議の内容も、定例の活動報告や市内の子ども・子育て支援に関する情報交換の他、3 月の会議では震災後 7 年が経過する陸前高田の状況や、3 月 11 日の過ごし方などを話し合うワークショップを行った。</p> <p>また、5 月の会議では、行政の担当課の方を会議に招き、子ども・子育てに関する行政のアンケート結果や、行政の動きに関して情報共有していただき、出席団体との意見交換の時間を設けた。</p> <p>こうした会議企画により、子ども・子育てに関わる市内の団体、機関、個人がつながりを保ち、情報・意見交換を行う場を継続して提供することができ</p>

	<p>た。</p> <p>2. 分科会の独立</p> <p>子ども支援 NW 会議の話し合いから派生した「たかたゆめキッチン」は、回を重ねるごとに様々な方に関わっていただくようになり、分科会も、子ども支援 NW から独立して開催できるまでに関係者が増加した。</p> <p>たかたゆめキッチンの運営自体も、初回は子ども支援 NW が主催としていたが、2 回目以降は「たかたゆめキッチン実行委員会」主催となり、子ども・子育て支援団体が主体となる「支援活動」から、住民が主体となり自発的に開催する「市民活動」へと発展した。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>1. 会議参加団体数の減少</p> <p>2017 年度は、これまで会議に継続して会議に出席して下さった参加者の退職や異動などがあり、これに対し、市内の子ども・子育て支援団体は増加していないことから、会議参加団体数が、昨年度の述べ 87 団体に対し、今年度はのべ 82 団体と、若干ではあるものの減少している。</p> <p>市内の子ども・子育て支援団体の現状を受け止めつつ、参加団体数の減少により参加者の満足度が低下することのないよう、会議の質を維持していくことが望ましい。</p>

3. 二又復興交流センター運営事業

実施範囲、期間	範囲：陸前高田市 期間：平成25年7月より継続
活動資金	事業収益
事業目的	事業を通じ、新たな『縁』や『陸前高田市を訪れる動機付け』を含めた交流人口の増加促進、また同事業を遂行するための職員雇用や各種関連会社などへの業務契約、宿泊者による市内での消費活動など、陸前高田市全体における雇用促進と地域経済の活性化一助となることを目的とする。
受益者	陸前高田市を訪れる人々 陸前高田市市民
事業内容	・施設運営管理：フロント受付業務、施設運営、施設清掃、設備機器維持管理業務 ・情報発信
今年度の営業実績	<p>陸前高田市市民を職員4名・パートタイム4名、計8名雇用 宿泊者数：のべ2,945名(前年度対比 85.4%) 売上高 :11,212,100円(前年度対比 82.5%) 客単価 :3,690円 (前年度対比 100.1%) (ともに平成29年10月1日～平成30年9月30日まで)</p> <p>前年同時期比で売上減となった。売上減の主要因は前年度に引き続き、客数減によるものである。 前年5月に実施が始まった東京海上日動火災株式会社様の新入社員研修の受け入れが前期より人数、回数ともに減少したことが大きい。 前期は2クール(51名様4泊5日、52名様4泊5日)であったものが、今期は1クール61名様4泊5日のみとなり、ほぼ半減している。</p> <p>◆今年度の集客の傾向 地球緑化センター様やはなそう基金様の「英語で夏休み in 陸前高田」など、年間行事で利用されているようなお客様は、ご利用後すぐに来年の予約をしていただくなど、リピート利用は引き続き多く、顧客の満足度はそれなりの水準が高い。 しかし、スポットでの宿泊利用は観光・ビジネス・ボランティア等含めて大幅な減少傾向である。震災からの年数の経過による東北や陸前高田市自体への関心の低下、市内・近隣の大規模な復旧工事の終了など外的な要因を強く感じる。これまで大規模工事の終了など建設業関連に長期借上げになっていたような一般の宿泊施設の稼働が回転するようにもなっており、引き続き市内・近隣ともにマーケットは買い手側の選択になりがちである。</p>
今年度の目標に対する成果	<p>1. 情報発信 国民の記憶の風化を防止、また、新たな縁の創出を目的として、法人ホームページやSNSサイト等を活用し、継続的に広報活動を実施する。月1回の更新を最低限の目標として交流センターの近況や地域の状況、予約の状況などを盛り込んで発信していくものとする。</p> <p>【目標】 ①法人HP、FBの定期的な更新(週1回) ②施設パンフレットの更新(適宜)</p>

	<p>③施設パンフレットの常設箇所の開拓、補充(随時)</p> <p>【成果】</p> <p>①法人HP、FBの定期的な更新(月1回) お客様の利用状況や施設環境のトピック的なエピソードを中心に記事を掲載。年間で計8回の更新と、目標としていた『月1回ペースの更新(年12回)』には至らなかった。ブログ担当の職員の離職、また予約販売の主軸が法人HPのフォームから宿泊予約サイトに移行しているためその後の運営のための業務仕分けによりプライオリティを下げたことが要因である。</p> <p>②施設パンフレットの更新 前年度更新した内容から変更点がなかったため、今年度は未実施。</p> <p>③施設パンフレットの常設箇所の開拓、補充 担当の職員の離職、また予約販売の主軸が宿泊予約サイトに移行していることから業務仕分けによりプライオリティを下げたことが要因である。</p> <p>2. 中長期的視点での調査および企画の実施</p> <p>パクト単独の自主事業にこだわる訳ではなく、行政や同市を中心に様々な領域で活動する他の法人や地域団体との連携も視野に入れる。 支援活動のみならず、商業・産業・観光といったあらゆる領域の外部リソースを取り込み。市内に還流することを目的とする。</p> <p>【目標】</p> <p>①増加傾向にある学校行事や部活・ゼミ等の合宿、移動教室や修学旅行といった学校案件の取り込みを推進していく。</p> <p>②閑散期への対策として『株式会社 宿泊予約経営研究所』と協働で『じゃらん net』『楽天トラベル』といった宿泊予約サイトでの客室販売を継続実施する。</p> <p>③交流人口増加に向けた法人間連携、官民連携への取り組みの強化。</p> <p>【成果】</p> <p>①学校行事や部活・ゼミ等の合宿、学校案件の取り込み 前年度から継続して積極的な誘客を実施。今年度は53校(案件)、1,035名の受け入れを実施。※前年度実績753名に対し、1,035名(前年比137.4%)と増加傾向。</p> <p>②『じゃらん net』『楽天トラベル』への施設情報掲載、客室販売 平成27年11月より実装、販売開始。 今期は『じゃらん net』にて132名、『楽天トラベル』にて97名、合計229名の予約を獲得。※楽天トラベルは前年度実績363名に対し、97名(前年比42.3%)と大幅な落ち込みを見せたことから、注視と要因分析が必要。</p> <p>③交流人口増加に向けた法人間連携、官民連携への取り組みの強化。 ・『陸前高田市NPO協会』に幹事として参画。 平成29年10月～平成30年9月までの間で12回参加。 今年度同協会の副会長に選任された。 ・平成28年12月より市の商工観光課主催の『観光団体定例打ち合わせ会』に参画。(今年度内は計12回の参加) 月1の定例会での数値報告に加え、インバウンド誘致を切り口とした研修会などにも積極的に参加。また、5月の連休、お盆休み期間に一本松茶屋で臨時観光案内</p>
--	---

	<p>窓口を出店するなど、観光客誘致に向けたアクションも実施。</p> <p>3. 地域活性化「交流施設」としての利用促進</p> <p>また「地域住民同士」や「宿泊者（外部からの流入人口）同士」といったところにとどまらず、それぞれが交流できる舞台となることで、施設の名称の通り「復興交流センター」として存在していくことを目的とする。</p> <p>【目標】</p> <p>①陸前高田市の推進する『はまっつけらいん、かだっつけらいん』への参加(随時)</p> <p>【成果】</p> <p>①市の地域福祉課、保健課が当地域を対象に『いきいき百歳体操』を1回実施。 会場提供で「地域住民同士」の交流の場づくりをサポート。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>【営業収益の改善】</p> <p>前年度に引き続き、今年度も事業の単年度決算において収益が赤字で終わっている。赤字発生の要因は宿泊者数減(前年対比 75.1%)による売上高減である。</p> <p>収益構造の改善には宿泊者数の向上が不可欠であることから、</p> <p>①行政、観光物産協会、関係機関との連携で『まち全体』での来訪者誘致 ②宿泊予約サイトへの掲載、予約販売に参入するなど、販路拡大・営業力の改善</p> <p>上記2点を中心に改善に取り組んでいく。</p>

4. 陸前高田市グローバルキャンパス 施設管理業務

実施範囲、期間	範囲：陸前高田市 期間：平成 29 年 4 月より開始
活動資金	業務委託料
事業目的	事業を通じ、新たな『縁』や『陸前高田市を訪れる動機付け』を含めた交流人口の増加促進、また同事業を遂行するための職員雇用や各種関連会社などへの業務契約、利用者による市内での消費活動など、陸前高田市全体における雇用促進と地域経済の活性化一助となることを目的とする。
受益者	陸前高田市を訪れる人々 陸前高田市市民
事業内容	・施設運営管理：フロント受付業務、施設運営、施設清掃、設備機器維持管理業務
今年度の営業実績	陸前高田市グローバルキャンパス運営機構との施設管理委託契約 業務委託料：年間 4,093,973 円(人件費、諸経費含む) ※管理業務の内容については契約時の仕様による 平成 29 年 4 月 25 日開所 陸前高田市市民を嘱託職員 1 名・アルバイト 2 名、計 3 名雇用 今期利用者数：のべ 5,6187 名(前年度対比 304.1-%) (ともに平成 29 年 4 月 25 日～平成 29 年 9 月 30 日まで) 年間予算：4,607,681 円(平成 29 年 9 月 30 日時点で 1,311,873 円を執行)
今年度の目標に対する成果	1. 開所および管理業務の適切化 【目標】 ①管理業務のルーティン化 ②人材、数値のマネジメント 【成果】 ①管理業務のルーティン化 嘱託職員を現場のリーダーとし、リーダーを中心に受付業務や施設清掃などの管理業務の内容を実践しルーティン化した。開所初年度であるため、仕様部分も含め運用実態に合わせ、試行錯誤をしながら適宜対応している。 ③人材・数値のマネジメント(年間 12 回) 担当管理職が適宜施設を巡回することや、月次のグローバルキャンパス運営機構の役員会への出席、人材・数値のマネジメント業務を実施。(平成 29 年 4 月開校であったため、今年度内は 12 回の実施) また、月次の職員の労務管理や職員のリクルート活動なども実施。
今後の課題	【管理業務の最適化】 現場での事象をサンプルとして抽出し、月度で開催されているグローバルキャンパス運営機構役員会に報告。管理業務の最適化を目指し、そのことで次年度以降の委託契約につなげていく。

以上